

Where Angels Fear to Tread の方法

— リズムと象徴 —

岡野浩史

Received October 23, 1992

E.M.Forsterの処女作*Where Angels Fear to Tread*は魅力あふれる作品である。全編が一種独特のみずみずしさをたたえており、同時代の批評家たちがそろって“original”ということばを使って評しているのも首肯できる。F.R.Leavisは、この作品を第一次世界大戦前に書かれたものでは最高の成功作であるとまで言っている。¹ リービスの言の当否はともかく、*Where Angels Fear to Tread*が、小説としての完成度という点からは、フォースターの全作品の中で*A Passage to India*に次ぐ地位を占めていることは確かなのではないだろうか。フォースターは*Where Angels Fear to Tread*において、フォースターが芸術作品の*raison d'être*としてあげた、“order”を備えた自律的小宇宙を作り出すことに成功していると言ってよいように思う。

それではなぜこの作品においてそういうことが可能になったのだろうか。もちろん、この間に対する答はそう容易に見つかるほど単純なものではない。しかし、この作品を成立させている多くのものの中から、方法という一点にだけ着目し、その一部だけでも解明できれば、*Where Angels Fear to Tread*の成功の秘密が多少なりとも明らかにできると思われる。さらに、*Where Angels Fear to Tread*の方法を検討することは、それ以後の小説の理解にも資するところがきわめて大きいだろう。何となれば、この処女作には、Elizabeth Bowenの言うように、後の小説でさらに展開されることになる諸々のものが“embryo”として含まれているのだから。²

方法もその例外ではない。以下の論では、「リズム」と「象徴」の二つに焦点を絞って、*Where Angels Fear to Tread*の方法を検討してみたい。

リズム

リズムというと、フォースターの小説論*Aspects of the Novel*中の、特殊な意味での「リズム」ということばが思い起こされるが、ここでは、そのこととは無関係にリズムということばを使う。他に適切な呼び方が見つからないので便宜的にそう呼んでおくにすぎない。強いて定義めいたものを示しておくなら「繰り返し現われ深化拡大していくイメージ」とでもいうことになるだろう。*Where Angels Fear to Tread*においては、このようなイメージが、作品の全体

* 英米語学科

Department of English

に一種リズムカルな感覚を生み出し、時間的空間的により充実した小説世界を構築することに成功しているように思われる。

ここではまず、作中に5回現われる“inlaid box”ということばを例にとって検討してみたい。このことばが最初に現われるのは冒頭から2ページ目である。二人の女性、つまり、未亡人のLilia HerritonとつきそいのCaroline Abbottがロンドンのチャリングクロス駅からイタリアへと旅立っていく。見送りの一人、リリアの義理の妹Harrietがリリアに呼び掛ける。“Handkerchiefs and collars, in my inlaid box! I’ve lent you my inlaid box.”³ 一見ごく普通に感じられるが、少しでも考えてみればそうでないことはすぐわかる。旅立つ者に対して、ある品物を与えたのではなく貸したのだと念を押すというのはまともな品性の持ち主のすることではない。しかも、読者にとっては、このことばがハリエットの口から聞かされる最初のことばである。フォースターはすでにこの時点でハリエットの持つ、一種異様なグロテスクなものを我々に伝えようとしているに違いない。しかし、そのことだけが、この見送りの場面で目立ちすぎてはいけない。また、後に、“inlaid box”が再び出てきた時に、この場面が思い起される程度には、読者の目にとまらなくてはならない。上の引用部は何気なく見えるが実はかなり精密な計算が働いている。

次に“inlaid box”が出てくるのは30ページほど後になる。ハリエットがイタリアで再婚したりリリアに書く手紙の中で言及される。

She (Lilia) wrote a jaunty account of her happiness to Mrs Herriton, and Harriet answered the letter saying (1) that all future communications should be addressed to the solicitors; (2) would Lilia return an inlaid box which Harriet had lent her—lent, not given—to keep handkerchiefs and collars in?⁴

ここを読むと我々はほとんど反射的に見送りの場面を思い出す。一家の者たちとにぎやかに見送りをする中でハリエットが言ったことばがほぼこれと同じであったことを。そして、その場面を思い出すということは、ここまでの時の経過を実感し、その間の様々な出来事を反芻するということである。つまり読者は自分の読んできたことをもう一度検討し、小説世界を再構成することになる。

もう一つここで大切なのは、この場面で改めて、読者はハリエットの異様さを確認させられるということである。彼女は熱心なプロテスタントの信者だが、弟Philipの言い方を借りるなら“*She had bolted all the cardinal virtues and couldn’t digest them.*”⁵あるいは、フォースターが“*What I Believe*”の中で信心について述べたときの表現を使うなら“*mental starch*”により心が固くなってしまった人物である。⁶ “inlaid box”の執拗な繰り返しは、こうしたハリエットのイメージを読者の心の中にしっかりと定着させるのに極めて有効に作用している。特に第3回目(p.106)、第5回目(p.146)に現われる“inlaid box”はそう言える。

“inlaid box”が4回目に現われるのは114ページにおいてである。場所は、リリアの夫Ginoの家。今は亡きリリアの部屋をキャロライン・アボットが訪れて、そこで、Baedekerのガイドブックと“inlaid box”とを目撃する。二つともほこりをかぶっている。ここでの“inlaid box”の登場は実に効果的である。しかも、リリアがイギリスから持ってきたBaedekerといっ

しょに登場させられている。我々は、リリアがイタリアに来ることになった事情、そして孤独に苦しみながら客死するに至るまでの状況をいやでも思い出す。ここで“inlaid box”は、リリアの嫁先ヘリトン家の彼女に対する冷たい仕打ちの見事な象徴ともなっている。さらに、読者とともにこの部屋にいてBaedekerと“inlaid box”とを見ているのは、リリアに結婚を勧めたキャロラインである。この場面は、この作品全体の中でもひとときわ深いペースをたたえたものとなっているが、その効果のかなりの部分は、“inlaid box”を繰り返し登場させて、イメージを積み重ね深化拡大させてきた「リズム」の効果に負っていると思われる。

もうひとつの例をあげてみよう。ジーノがフィリップにリリアとすでに結婚している事実を告げた後、つい興奮してフィリップをベッドに突き倒してしまう場面がある。(p.47) この場面までのジーノに関する著者の説明はフィリップの目を通して見たジーノであり、否定的である。ジーノは、ハンサムで粗野な欲得ずくのイタリア人の若者にすぎない。フィリップを突き倒して部屋から走り出て行くジーノの後ろ姿を見ながら、読者は、自分の印象が正しかったことを確認した気になる。

ところが10ページ後の57ページに再びこの場面が現われるときにはその認識が間違っていたことを知らされる。ジーノが友人にそのときのことを語り、そのジーノの語り口から、読者は、ジーノが、その一見粗野な行動にもかかわらず、非常に純粋でやさしい心情の持ち主であることを認識するのである。ここは我々を不意打ちにし、一種心地よいショックを与える。それと同時に、ベッドに突き倒されたフィリップが、プライドを傷つけられ、“He has assaulted me. I could prosecute him.”と言って、ジーノを憎悪したことを思い出す。⁷ フィリップはまだジーノの本当の姿を知らないのである。

次にこの場面が登場する時 (p.97), フィリップは、ジーノに会いに行こうとしている時である。フィリップはこれからの訪問のことを考えながら、ベッドに突き倒された時のことを苦々しい思いで回想している。ここで読者はその場面をフィリップとともに思い出し、さらにフィリップという人物の、人間としての生き方を改めて反芻することになる。彼は人生というものを観念でしかとらえられない。頭の中でだけ人生を理解して、現実とかかわろうとしない。もしもかかわらざるをえないということになれば、観念だけで処理してしまおうとする。しかし、現実には観念だけで対応できるほど単純なものではない。軽蔑しているジーノに、ベッドに突き倒されるようなことも起こりうるのである。フィリップは頭の良さを自認し、ジーノを軽蔑しているだけにひどい屈辱感が残る。フォースターは読者にそのことをはっきりとわからせる。そしてこの認識は、前に出てきた、ジーノのフィリップに対する思いと対比されて読者に意識されることとなる。

次にその場面がまた繰り返して出てくるのは、103ページである。3回目までのところで、作者は、フィリップのジーノに対する誤解がいつどのように解かれるのか、読者の関心を十分に高めておく。だから、キャロラインがフィリップに、ジーノの真情を語ってフィリップの誤解を解くとき、我々はフィリップとともに深く感動することになる。

以上二つの例をもとにリズムがどう使われているかを示してみたが、記号めいたものを使ってまとめれば次のようになるだろう。まず、あるAが小説中に登場させられる。次にそれが現われた時には、Aの後に現われたAに関する様々のものを含んでいるから、A'と表せよう。さらに次に現われるときには、さらにA'以後のものを付加させたA''である。以下A'''もA''''

も同様である。

A以降出てくるA', A''等はいずれも深化拡大されたAである。*Where Angels Fear to Tread*の持つ、豊かで充実した小説空間はこれらのものと深く関わっているように思える。そして、A', A'', A'''と類似したものが間を置いて繰り返し登場する時、作品は、リズムカルな、一種独特の音楽的效果を与えられる。*Where Angels Fear to Tread*の読者が感じる独特の軽快感は「リズム」の効果によるところがかなり大きいのではないだろうか。

象 徴

今ここで象徴と書いたが、ここでは象徴ということばをごく一般的な意味で使うこととする。たとえば、「リズム」について議論した際、「inlaid box」という例を検討してみたが、この「inlaid box」は、一言だけ言及したようにハリエットのかたくなで虚ろな人間性を「象徴的」に表しているばかりでなく、ヘリトン家あるいはヘリトン家を育てたイギリス中産階級の悪しきモラルを「象徴」しているといってもよいだろう。そして、「inlaid box」に象徴的意味を与えることで*Where Angels Fear to Tread*の世界は確実により豊かなものになっていると言ってよい。

フォースターは小説中の実に様々なものに象徴的意味を与える。そのことに気が付き、作者の発信している象徴的意味を読み取れるかどうかは読者次第である。読みをどれだけ豊かにできるかは読者にかかっている。象徴的意味が比較的読取りやすい場合もあるが、そうでないものも多い。以下、二つを例にあげて検討してみたい。

A starved cat had been worrying them all for pieces of the purple quivering beef they were trying to swallow. Signor Carella, with the brutality so common in Italians, had caught her by the paw and flung her away from him. Now she had climbed up to the bowl and was trying to hook out the fish. He got up, drove her off, and, finding a large glass stopper by the bowl, entirely plugged up the aperture with it.

‘But may not the fish die?’ said Miss Abbott. ‘They have no air.’

‘Fish live on water, not on air,’ he replied in a knowing voice, and sat down.⁸

上の場面は、フィリップが、リリアとジーノとの結婚を止めに行った際の食事のときの描写である。猫をどう扱うか描写することで、もちろんフォースターはジーノの持つ暴力的な要素を表現しているわけだが、そのことを読者に伝えるなら、引用部分の最初の三分の一だけで十分なはずである。ジーノの金魚に対する扱いは粗暴のもうひとつの実例ということだけでは説明がつかない。無駄である。なぜこういう書き込みをしたのか。

実はここを読んだだけではわからないように書かれているのだ。読者がその意味を知るのは20ページほど後になってからのことである。

フォースターは、この引用部のあともなく、リリアとジーノの結婚生活を描いてゆく。最初はリリアが主導権を握っていた。彼女は万事イギリス式のやりかたでとおそうとする。しかし、そのうち次第にジーノが優位に立ち、ここはイタリアなのだからという理由で、すべてイ

タリア式のやりかたをリリアに押しつけるようになる。それがリリアにとってどういう意味を持つかということなどは一切かまわないし考えられもしない。そしてついには家に鍵をかけてリリアを家に閉じ込めて自由に出入りできないようにしてしまう。読者はここまで来て初めて金魚の意味を悟るのである。つまり水槽に閉じ込められた金魚はそれからのリリアの運命を象徴的に予告していたのである。

フォースターは作中にこのような象徴的な意味を含んだものをさりげなく織り込む。そしてその後の展開を暗示しておく。前述したように、象徴を読み取れるかどうかは、ひとえに読者にかかっている。しかし、仮に読者が、はっきりと意識的に、象徴として使われているものの象徴の意味を読み取らないとしても、それは意識下に残り、あとで事が実現したときに、その真実性を疑うことなく読者が受け入れられるような素地を準備するのではないだろうか。Where Angels Fear to Treadがフォースターの作品の中でも、A Passage to Indiaに次いで、際立ったリアリティーを持ちえているのはこのような象徴的手法がうまく生かされていることが大きな要因となっているように思える。

もうひとつの例をみてみよう。

She watched his smoke-ring. The air had carried it slowly away from him, and brought it out intact upon the landing.

'Two hundred and five—eighty-two. In any case I shall put them on Bari, not on Florence. I cannot tell you why; I have a feeling this week for Bari.' Again she tried to speak. But the ring mesmerized her. It had become vast and elliptical, and floated in at the reception-room door...

The ring had extended its pale blue coils towards her. She lost self-control. It enveloped her. As if it was a breath from the pit, she screamed.⁹

これはキャロラインが赤ん坊のことでジーノと交渉のために訪れたときの出来事である。この場面で“smoke-ring”はなぜ登場するのか。また、なぜジーノから発されてキャロラインを包み込んでしまうのか。これらのことはここを読んだだけではわからない。

この後キャロラインは用件を切りだして交渉をしたいと思うが言い出せない。それどころか、ジーノが赤ん坊を入浴させるのを代わりにやってやる破目になる。その最中にフィリップがやってくるとあわてて逃げだして教会にこもってしまう。後で、フィリップが会いに行くと、彼女は、もうジーノと赤ん坊とを引き離す気はないという意味のことを言い、ジーノのことについては何も言わない。読者が“smoke-ring”の意味を知らされるのは、実に40ページ以上も後になってからのことである。キャロラインがフィリップに向かってジーノへの愛を打ち明けるところまで来て、やっと我々はその意味がわかる。

'...But I didn't understand till the morning. Then you opened the door—and I knew why I had been so happy. Afterwards, in the church, I prayed for us all; not for anything new, but that we might just be as we were—he with the child he loved, you and I and Harriet safe out of the place—and that I might never see him or speak

to him again. I could have pulled through them—the thing was only coming near, like a wreath of smoke; it hadn't wrapped me round.’¹⁰

上に引用した部分の最後のところまできてやっと“smoke-ring”の意味がキャロラインの口から語られる。ジーノが発してキャロラインを虜にしたもの—それが“smoke-ring”の表すものである。何か。狭く考えれば、もちろんそれは自然児ジーノの男性としての魅力である。しかし、より広いコンテクストで、この小説全体の中でジーノの担っている役割を考えると、この“smoke-ring”はジーノから発散される生命の息吹の象徴ではないだろうか。キャロラインはこの“inspiration”によって自分の中に眠っていた生命力に目覚め、そして、真の人生に目覚めていくのである。

キャロラインにとってそれまでの人生はキリスト教徒としての教会活動と父親の世話以外には何も存在しなかった。イタリアに行く気になったのも、生涯ただ一度の外国旅行を一生の語りぐさにしたかったからだ。現実の人生に対する諦めと妥協—それが彼女の人生だった。しかし、人生とは無限に続く灰色の現実ではない。現実とは悲劇も起こりうる（赤ん坊の死）が、奇跡も起こりうる（キャロラインのジーノへの愛）豊かな可能性の総体なのだ。キャロラインはジーノを通して初めてそのことに気が付くのである。そして次のように述懐する。

‘...Every little trifle, for some reason, does seem incalculably important today, and when you say of a thing that “nothing hangs on it” it sounds like blasphemy. There’s never any knowing—how am I to put it?—which of our actions, which of our idlenesses won’t have things hanging on it for ever.’¹¹

我々のことばのひとつひとつが、我々の行動のひとつひとつが、それぞれが切実な意味を帯びて我々に感じられる瞬間—このときには、周囲のささやかなものまでもが、新しい輝きを放ちつつ、我々の目の前に立ちあらわれてくる。生きるとはそういう瞬間をどれだけ持つことができるかということなのだろう。キャロラインには今それが見えているのである。

そしてまた、ひとつひとつの細部が重要な意味を担っているということならこの小説 *Where Angels Fear to Tread* がまさにそうなのである。フォースターが様々な形で織り込んでいる象徴を読者が過たず認識していくとき、この小説の細部が異様に生気を帯びていることに改めて思いいたる。キャロラインの言う“every little trifle”がこの小説の場合においても、実は抜きさしならぬ重要な意味を賦与されているのである。この点においてフォースターは、この小説全体をも実人生の象徴としているかのようなのである。ひとつひとつの細部の持つ豊かさに気がつかなければ、人生を真に生きることはできないし、この小説 *Where Angels Fear to Tread* も読むことはできないのである。

註

1. F. R. Leavis, *The Common Pursuit* (Penguin Books, 1962), p. 262.
2. Philip Gardner, ed., *E. M. Forster: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1973), p.380.
3. E. M. Forster, *Where Angels Fear to Tread* (Penguin Books, 1976), p.20.
4. *Ibid.*, p.50.
5. *Ibid.*, p.26.
6. E. M. Forster, "What I Believe," in *Two Cheers for Democracy* (London:Edward Arnold, 1972), p.65.
7. Forster, *Where Angels Fear to Tread*, p.47.
8. *Ibid.*, p.42.
9. *Ibid.*, p.116
10. *Ibid.*, p.159.
11. *Ibid.*, p.136.